フランスとオランダにおける青少年柔道参加者の参加動機と達成目標

北村尚浩[1)]，川西正志[1)]，濱田初幸[2)]，前阪茂樹[2)]

Motivation and achievement goals of young judo participants in France and the Netherlands

Takahiro KITAMURA

Abstract

Budo has been a compulsory program in junior high school physical education in Japan since 2012, with the goals of better educating Japanese junior high school students in traditional Japanese culture, and of inspiring patriotism through the experience of Budo. In contrast, judo has become popular around the world as an Olympic sport. Similarly, karate, aikido and kendo have helped to spread Budo to many countries as sports and as elements of Japanese culture. In the context of physical education in Japan, the goals of Budo are twofold: as an instrument for education, and as one for sports. In the educational context, character building through Budo is principal, while skill development is fundamental to the aspect of sport.

The purpose of this study was to clarify values apparent in the judo of foreign youth judo participants by examining their achievement goals and initial motivation with regard to learning judo. Questionnaire-based surveys were conducted on young judoka through judo clubs in France and the Netherlands in November to December 2016. The principal results were as follows:

1) Judo participants in France and the Netherlands view judo as a sports or physical activity, so cultural factors have little impact on initial motivation.
2) Young judo participants in France and the Netherlands showed more task orientation than ego orientation.
3) Judo participants in France view judo as a sport more than do judo participants in the Netherlands.

These results suggest that judo has become widespread in sports culture, however the essential elements of culture have been kept in Budo.

Keywords: motivation, achievement goals, judo and globalization

和文抄録

日本の伝統文化の教育と愛国心の涵養を目的として，中学校体育で武道が必修化された．柔道はオリンピックスポーツとして世界中で人気があり，空手，合気道，剣道などその他の武道種目も，スポーツとしてあるいは日本の文化として多くの国に普及している．日本における体育科教育の文脈においては，武道は教育のためのツールとして，そして一つのスポーツ種目として，２つの目的を有している．教育的な文脈においては武道を通しての人格形成が重要視され，スポーツの側面としては技能向上が重視される．本研究の目的は，海外における青少年柔道参加者の達成目標と武道参加動機を通して彼らの柔道観を明らかにすることである．そのため，2016年11月から12月にかけて，フランスとオランダの柔道クラブを通して

1) 鹿屋体育大学スポーツ人文・応用社会科学系
2) 鹿屋体育大学スポーツ・武道実践科学系

の質問紙調査を実施した．主な結果は次のとおりである．
1）柔道をスポーツあるいは身体活動種目の一つとして捉えており，参加動機として文化的背景の影響は弱い．
2）達成目標としては自我志向性よりも課題志向性の方が強い．
3）フランスの参加者の方がオランダの参加者に比べて，より強く柔道をスポーツとして認識している．
これらの結果から，柔道はグローバル化の過程においてスポーツ種目の一つとしてそれぞれのスポーツ文化に浸透しており，その一方で武道の本質に沿った形で活動されていることが示唆された．

キーワード：参加動機，達成目標，柔道，グローバル化

緒言

2012年度に日本の伝統文化の一つである武道が中学校の体育において必修化されてから，すでに５年が経過した．必修化の背景には，武道の学習を通して我が国固有の伝統と文化により一層触れることができるようにするとともに，その教育，継承が大きな目的として位置づけられている（中央教育審議会，2008）．必修化に際してはその賛否についての議論が多くなされたが，柔道や剣道をはじめとする武道は日本の伝統文化の一つでありながらも，その参加人口は減少傾向にある．成人のスポーツ参加率20位までに武道種目は１種目も見受けられず（SSF 笹川スポーツ財団，2016），中学生の運動部活動加入状況（中学校体育連盟，2017）を見ても，野球やサッカー，ソフトテニスなどに押され気味である．将来の実施意向も，10代が今後も続けたい，または新たにはじめたいと思う運動・スポーツ種目として20位以内に弓道，剣道，空手が挙げられているが，いずれも３％に満たない（SSF 笹川スポーツ財団，2016）．

一方，オリンピック種目の一つである柔道のように，武道種目が諸外国に波及し，グローバル化の流れがあることもまた事実である．フランスでの柔道人口は55万人を超えており（Ministère des sports, 2017）全日本柔道連盟の登録者およそ155,000人（全日本柔道連盟，2018）の３倍以上に達している．「スポーツとしての柔道は1920年にドイツで確立された」（ブルース，2008）と言われ，1948年のヨーロッパ柔道連盟の設立，1951年の国際柔道連盟の設立と国際的な組織化が進められた。柔道が初めて正式種目となった1964年のオリンピック東京大会の無差別級でオランダのアントン・ヘーシンクが金メダルを獲得したことで，柔道のオリンピックスポーツとしてのアイデンティティの獲得と，その国際性の証明がなされた（ブルース，2008）．柔道の他，1976年に設立された国際合気道連盟（International Aikido Federation）には49カ国が加盟しており，国際合気道大会が４年に１回開催されている（International Aikido Federation，2018）．空手道は1960年代以降にヨーロッパを中心として広がりを見せ，1993年にそれまでの世界空手道連合（World Union of Karate Organizations，WUKO）から世界空手道連盟（World Karate Federation）に改称されて以降，オリンピック種目化を目指してきたが，2020年の東京大会で追加競技となることが国際オリンピック委員会によって承認された（2016）．設立時に加盟国が17カ国だった国際剣道連盟（Federation of International Kendo，FIK）も2015年には57カ国が加盟するまでになり，３年に１回開催される世界剣道選手権大会は2018年で17回目を数える．

このような武道の国際化，国際的な普及に伴って，いわゆる武道のスポーツ化を危惧する声も聞かれる（日本武道学会，2008）．多様な文化や価値観の中で武道の持つ伝統性と国際化との両立は容易ではなく，オリンピック種目でもある柔道は，スポーツ化が進む中で本来の柔道を崩壊させる傾向が強まった（藤堂，1990）との声もある．柔道は文化的相対主義の潮流の中で，それぞれの

国に合った文化の中で変容していくとも言われている（溝口，2016）．もともと武道は，海外に移住した日系人社会でそこに生きる人々が日系人の価値や姿勢を学び，また，文化を再確認するものとして理解されていた（ブルース，2008）．それが現在の柔道は，ヨーロッパを中心として，発祥国である日本を凌ぐ普及を見せている．

そこで本研究では，オリンピック種目としても海外での人気の高い柔道を取り上げ，海外の柔道参加者の参加動機と柔道を行う際の達成目標に着目した．武道のグローバリゼーション（Globalization）の潮流の中にあって，海外の人々が武道に参加する動機も多くの関心を集めており，自己防衛，健康づくり，鍛練などが典型的な動機として挙げられている（Columbus & Rice, 1998）．武道を習い始めたきっかけ（initial motivation）を検証した研究（Twemlow et al., 1996）や，海外の武道参加者の日常生活と武道参加との関係を検討した研究（Columbus and Rice, 1998）などに見られるように，社会的，文化的背景の異なる国の人々が武道に何を求め，どのような動機で活動しているのかミクロなレベルで明らかにすることは，海外での武道の普及やその背景に横たわる日本の文化の理解を促進する上で重要なことであり，日本での普及を考える上で多くの示唆が含まれるものである．

また，Nicholls（1984）によって提唱された達成目標理論は，行動の方向性や選択にかかわる概念としてスポーツ行動の喚起や継続に重要な意味を持つとされている（西田・小縣，2008）．技能の習得や課題達成を目標とする課題志向性と，他者に対する自己のパフォーマンスの誇示を目標とする自我志向性の二側面から構成されており，性や競技レベル，動機づけなどとの関連が検討されてきた（White and Duda,1994：Harwood et al., 2000：Duda，2001：伊藤，1996：藤田・杉原，2007など）．合気道参加者と柔道参加者の達成目標を比較した研究では，合気道参加者は柔道参加者に比べて課題達成志向が強く，柔道参加者は合気道参加者に比べて自我志向性が強いことが報告されているほか（Gernigon and Le Bars, 2000），カナダの武道クラブ会員の達成目標を種目間で比較した研究なども見られる（北村ら，2008）．課題志向性は，能力の評価基準を自己言及的なものとして，努力すること，熟達することを有能と捉える（藤田，2009）ことから，身体技法の練習によって人間形成を目指す精神修養文化（百鬼，2013）であり，人間形成の道としての修業に剣道の本質がある（日本武道学会，2008）武道では，志向されるべき目標であると言える．

本研究は，フランスとオランダにおける青少年柔道実施者を対象とした質問紙調査を通して，柔道への参加動機と達成目標を明らかにすることを通して，海外における柔道参加者の柔道観を明らかにすることを目的とした．

方法

1）調査方法

本研究ではフランスとオランダにおける柔道クラブに所属する青少年を対象に，質問紙調査を行なった．2016年11月から12月にかけて，フランス・ボルドー市とその近郊の柔道クラブ及び，オランダ・スパイケニッセ市の柔道クラブメンバーを対象として，クラブを通して質問紙の配布，回収を行った．フランスでの調査はフランス柔術柔道連盟を通して，オランダでの調査は柔道クラブへ直接配布，回収を依頼した．回収数はフランス169部（62.6%），オランダ101部（62.6%），計270部であった．そのうち，参加動機，達成目標の各項目に欠損値のない230名を分析対象とした．表１にサンプルの属性を国ごとに示している．オランダの回答者は男性が76.1%，女性が23.9% で平均年齢は13.4±1.86歳である．柔道の平均継続年数は6.01±2.89年で１週間当たりの平均活動頻度は1.86±1.05回，一回あたりの練習時間は，1.42±0.81時間であった．フランスの回答者は男性が62.7%，女性が37.3% で平均年齢は15.4±1.57歳で，平均継続年数は9.56±2.82年，１週間あたり

表１　サンプルの属性と柔道実施状況

	オランダ（n=88）		フランス（n=142）	
	n	%	n	%
性別*				
男性	67	76.1	89	62.7
女性	21	23.9	53	37.3
競技レベル**				
地区/市大会	30	38.5	3	2.2
県大会	19	24.4	5	3.6
州大会	12	15.4	22	15.9
全国大会	4	5.1	71	51.4
国際大会	13	16.7	37	26.8
平均年齢**	13.4±1.89		15.4±1.57	
平均継続期間（年）**	6.01±2.89		9.56±2.82	
平均活動頻度（回/週）**	1.86±1.05		4.40±1.24	
平均練習時間（時間/回）**	1.42±0.81		1.96±0.52	

*p<.05　**p<.01

の平均活動頻度は4.40±1.24回，１回あたりの平均練習時間は1.96±0.52時間であった．

両国間のサンプルの属性を比べると，男女比ではオランダの方がフランスに比べて15ポイントほど男子の割合が高く（p<.05），平均年齢はフランスの方が２歳ほど高いサンプルである（p<.01）．柔道の継続年数も，フランスのサンプルの方がオランダのサンプルよりも３年余り長い（p<.01）ことがわかる．また，１回あたりの練習時間もフランスは約２時間であったのに対し，オランダはおよそ1.4時間であった（p<.01）．サンプルの競技レベルも，フランスのサンプルは全国大会レベル以上の者が８割近くを占めており，オランダのサンプルに比べて高い（p<.01）．これらの両国のサンプル間に見られる差は，データの収集方法によるものと考えられる．すなわち，フランスでは調査依頼を柔術柔道連盟に対して行ったため，選手育成を主目的としたクラブを中心としてデータが集められたのに対して，オランダは地域の柔道クラブに直接調査依頼を行っており，初心者からレベルの高い選手まで幅広い層の参加者からデータが収集されたことが，個人的属性や柔道実施状況などの違いに影響したものであると考えられる．

なお，本研究の実施にあたっては，2016年10月26日開催の鹿屋体育大学倫理審査小委員会の承認を得た．

2）調査内容

調査内容は，個人的属性，柔道実施状況，運動有能感，柔道の教育的効果，参加動機，達成目標である．参加動機は Twemlow ら（1996）による武道参加者の参加動機に関する尺度に「両親，友人，あるいは他の人たち」「海外の文化を理解する」の２項目を加えたもの15項目を，達成目標は Roberts ら（1998）による Perception of Success Questionnaire をそれぞれ用いた．

3）分析方法

参加動機に関する項目は，「あてはまる」から「あてはまらない」までの５段階評定で回答を求め，間隔尺度を構成するものと仮定して５～１までの得点を与えて数値化した．また，達成目標を測定した Roberts ら（1998）の Perception of Success Questionnaire（POSQ）は，スポーツにおける目標志向（課題志向と自我志向）を測定する尺度で，調査対象者には「武道を行っているとき，次のような場面で楽しさや喜びを感じる :」という文に続けて12の場面を挙げ，「よく当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの５段階評定で回答を求め，同様に間隔尺度を構成するものと仮定して５～１までの得点を与えて数値化した．さらに，達成目標12項目については課題志向性と自我志向性を構成するそれぞれ６項目の合計得点を算出し，国による平均値の比較を行った．また，参加動機15項目についても，国ごとに平均値を算出して比較を行った．

結果

1）柔道参加動機

日本では自国の伝統文化の一つとして捉えられる武道であるが，ヨーロッパの青少年はどのようなきっかけ（initial motivation）で柔道を行うよう

表２　柔道参加動機

	mean	S.D.
運動のひとつ	4.50	0.91
ひとつのスポーツとして	4.50	0.89
楽しみのため	4.50	0.88
試合・大会への参加	3.93	1.40
自信をつけるため	3.82	1.22
健康増進のため	3.69	1.31
自己鍛錬	3.67	1.35
なりたい自分になるため	3.59	1.40
自己防衛	3.58	1.41
精神修養として	3.56	1.34
両親・友人等のすすめ	3.39	1.52
怒りのはけ口として	3.32	1.61
海外の文化を理解する	2.85	1.36
武道映画	2.24	1.40
有名になるため	2.12	1.37

になったのであろうか．参加動機項目について数値化し，その平均値を表２に示している．「運動のひとつ」（4.50±0.91）の他，「ひとつのスポーツとして」（4.50±0.89），「楽しみのため」（4.50±0.88），が最も高い値を示し，「試合・大会への参加」（3.93±1.40）などが上位を占めている．概ね柔道をスポーツあるいは身体活動種目の一つとして捉えている様子で，「海外の文化を理解する」（2.85±1.36）といった異文化理解に対する関心を示す項目は高い値を示さず，参加動機として文化的背景の影響や両親や友人など他者による影響は強くないようである．

両国間の平均値を比較したところ，「自己防衛」「運動のひとつ」「自信をつけるため」「楽しみのため」「怒りのはけ口として」「試合・大会への参加」「有名になるため」「両親・友人等のすすめ」の８項目で有意な差が認められた（表３）．「自己防衛」と「自信をつけるため」の２項目では，フランスよりもオランダの方が高い値を示し，それ以外ではフランスの方が高い値を示した．

2）柔道における達成目標

フランス，オランダの青少年は，柔道を行っていてどのようなときに楽しさや喜びを感じるので

表３　柔道参加動機の国による比較

	オランダ（n=88）		フランス（n=142）		t
	mean	S.D.	mean	S.D.	
自己防衛	4.19	.99	3.20	1.50	6.00**
運動のひとつ	4.26	.94	4.65	.86	-3.19**
自信をつけるため	4.15	1.05	3.62	1.28	3.42**
楽しみのため	4.27	.89	4.64	.85	-3.14**
ひとつのスポーツとして	4.40	.75	4.57	.96	-1.44
武道映画	2.40	1.44	2.15	1.36	1.32
精神修養として	3.38	1.23	3.68	1.39	-1.66
健康増進のため	3.74	1.25	3.66	1.35	0.43
怒りのはけ口として	2.74	1.59	3.68	1.52	-4.46**
試合・大会への参加	3.17	1.42	4.41	1.17	-6.87**
有名になるため	1.86	1.14	2.28	1.47	-2.41*
なりたい自分になるため	3.36	1.42	3.73	1.38	-1.91
海外の文化を理解する	2.67	1.35	2.96	1.36	-1.57
両親・友人等のすすめ	2.72	1.46	3.80	1.41	-5.60**
自己鍛錬	3.73	1.33	3.64	1.37	0.47

*p<.05　**p<.01

表４　達成目標（n=230）

	mean	S.D.	Chronbach's α
【課題志向性】			
上達したとき	4.76	0.53	0.72
精いっぱい努力しているとき	4.66	0.60	
困難を乗り切ったとき	4.66	0.74	
自分の目標を達成したとき	4.64	0.76	
できなかったことができるようになったとき	4.57	0.69	
ベストを発揮できたとき	4.50	0.83	
【自我志向性】			
相手を倒したとき	4.33	0.87	0.87
他人ができないことを自分ができたとき	3.87	1.15	
自分が明らかに上手なとき	3.83	1.21	
自分が一番だと相手に示したとき	3.75	1.16	
他の人よりもうまくできたとき	3.62	1.16	
自分が一番なとき	3.61	1.26	

あろうか．達成目標12項目を数値化しその平均値を表４に示している．最も高い値を示したのは「上達したとき」（4.76±0.53）で，次いで「精いっぱい努力しているとき」（4.66±0.60），「困難を乗り切ったとき」（4.66 ±0.74）と続いている．一方，最も低い値を示したのは「自分が一番なとき」（3.61±1.26），で，次いで「他の人より

表５　達成目標（n=230）

	mean	S.D.
自我志向	23.00	5.33
課題志向	27.79	2.71

表６　達成目標の国による比較

	オランダ（n=88）		フランス（n=142）		t
	mean	S.D.	mean	S.D.	
自我志向	21.00	6.07	24.25	4.40	-4.37**
課題志向	27.31	2.95	28.08	2.51	-2.13*

*p<.05　**p<.01

もうまくできたとき」（3.62±1.16），「自分が一番だと相手に示したとき」（3.75±1.16）の順であった．そして，自我志向性と課題志向性を構成する下位尺度それぞれ６項目の妥当性を検証するため，信頼性係数クロンバックのα（Chronbach's α）を算出した．その結果，課題志向性を構成する６項目では0.72，自我指向性を構成する６項目では0.87という値を示し比較的安定した尺度であると解釈できる．それぞれ自我志向性の合計得点の平均値は23.00±5.33，課題志向性の合計得点の平均値は27.79±2.71であった（表５）．そして国ごとの平均値を算出し，比較した結果を表６に示している．その結果，自我志向性において両国の間に１％水準で，課題志向性においては５％水準で有意な差が認められた．自我志向はオランダの参加者の平均値が21.00±6.07であったのに対して，フランスの参加者の平均値は24.25±4.40と3.25ポイント高かった．課題志向の平均値はそれぞれ27.31±2.95と28.08±2.51で，フランスの参加者の方が0.7ポイントほど高かった．

考察

今回のサンプルが柔道を行うようになったきっかけとしては，オランダ，フランスいずれの参加者とも柔道をスポーツあるいは身体活動の一種目として捉えている一方で，異国の文化を理解しようという態度は弱いことが明らかになった．このことは，柔道がスポーツとして認識され既に彼らのスポーツ文化の一部に組み込まれていることを示唆するものである．柔道の創始者である嘉納治五郎が普及のため初めてヨーロッパに渡ったのは1889年で，当時のヨーロッパの人々の柔道に対する見方として「遥か遠い未知の国東洋の神秘的武術の域を出なかった」（村田，2011）ものであったが，1939年にオランダ柔道連盟が，1946年にはフランス柔道柔術連盟が設立され，それぞれの国における柔道の普及が進められてきた．その成果として，各国のスポーツ文化への融合が図られオランダ，フランスともオリンピックや世界選手権などの国際大会においても多くのメダリストを輩出するようになり，競技人口もフランスでは日本の３倍に達している．しかし，一方で自己実現や自己修養といった日本で武道の教育効果として期待されているような，いわゆる武道の本質的側面はそれぞれの国における普及のプロセスの中で希薄化している感は否めない．

また，両国間の平均値の比較からはフランスの参加者の方が，スポーツとして試合や大会に出場することが強い参加動機として挙げられ，柔道を開始するにあたって周囲に重要な他者の存在があったことが示唆されている．これらは柔道を開始した際の当初の動機（initial motivation）について尋ねたものであり，現在の年齢や柔道経験などの要因の影響は小さいと考えられる．フランス柔道柔術連盟登録者は55万人を超えて広く普及しており，このような両国の柔道を取り巻く環境の違いが，青少年の柔道観に影響を及ぼしていることが示唆される．

次に，達成動機を測定した Perception of Success Questionnaire は，技能の習得や課題達成を目標とする課題志向性と，他者に対する自己のパフォーマンスの誇示を目標とする自我志向性の二つの側面を測定する12項目の下位尺度で構成されている．今回のサンプルは課題志向性を表す項目で高い値を示し，自我志向性を表す項目で低い値を示す傾向にあった．また，それぞれの志向の強さを示す下位尺度の合計点も，自我志向性よりも課題

志向性の方が高い値を示した．そもそも武道は，人間形成の道としての修業に剣道の本質がある（日本武道学会，2008）とも言われるように，他人と競うということよりも自己の技術を高め，技を究める中での自己修練が本来の目的である．すなわち，課題志向性を表す項目が高い値を示していることは，武道の本質に沿う形で参加者が活動していることの表れと解釈できよう．また，オランダでは Dutch System と呼ばれる強化のための支援活動と合わせて，教育としての柔道も普及されてきた（山崎ら，2005）．フランスにおいても，柔道の持つ精神性や教育効果が広く支持され（高木，2010），教育的価値の高いスポーツ（日本実業柔道連盟，1998）として柔道人口拡大の一翼を担ってきた．このように，自我志向性に比べて課題志向性の強さは，柔道の教育的側面が軽視されることなく両国において普及がなされたことによるものと考えられる．

一方，達成目標を２カ国間で比較したところ，フランスの柔道家はオランダの柔道家よりも自我志向性が強いことが示された．船越ら（2000）によれば，「柔道をスポーツと認識し，現実から離れた虚構の世界だからこそ，自由に威嚇攻撃に徹する姿が育つ」のがフランス柔道の特徴とされ，また，山崎らの一連の報告（2000：2005）では，フランスの柔道家は他国の柔道家と比べて勝利志向が強く，オランダの柔道家は勝利志向，楽しみ志向への関心が低く，自己鍛錬志向が高いことが報告されている．競技スポーツの参加者は非競技スポーツの参加者に比べて自我志向性が強いことが報告され（White and Duda, 1994），北村ら（2008）は，カナダの武道参加者を対象として，柔道の参加者は他の種目の参加者と比べて自我志向性が強く，参加動機としても自己の競技能力や技術を他人に示す場として，競技会などに出場することが強い動機づけとなっていると報告しており，これらの背景として，柔道のスポーツ化が大きな影響を及ぼしていると考えられる．また，合気道家と柔道家を対象としてそれぞれの経験による達成目標を検証した Gernigon and Le Bars（2000）によれば，いずれの種目においても初心者に比べて熟練者の自我志向性が高いことが明らかにされているが，今回のサンプルは，フランスの柔道家の経験年数や競技レベルはオランダの柔道家に比べて高く，このことが達成目標の差に影響を及ぼしている可能性は排除できない．しかしながら，先述した参加動機の両国間の比較を踏まえると，フランスの柔道家はオランダの柔道家よりも柔道をスポーツの１つの種目として強く認識しており，経験を重ねて競技レベルが高まることで大会や競技会に出場することが，自分の力を誇示することのできる機会として，強い動機づけの一つになっていることが窺える．

結語

本研究では，フランスとオランダの柔道クラブで活動する青少年の参加動機と達成目標を測定し，彼らの柔道観について明らかにすることを目的に検証を進めてきた．その結果，柔道を開始した動機についてはフランスの参加者の方がスポーツの一つとして柔道を選択し，試合や競技会への参加が強い要因であったことが明らかになった．これは柔道を取り巻く環境の違いが影響していると考えられ，フランスにおける柔道が，国際化の過程を経てスポーツ種目の一つとしてより強く若者に認識されていることの表れであると推察できる．また，両者の達成目標は課題志向性を表す項目で高い値を示し，自我志向性を表す項目では低い値を示す傾向が見られた．それぞれの下位尺度の合計点を算出し両国間の平均値を比較したところ，フランスの参加者とオランダの参加者との間で有意な差が認められた．フランスの参加者の継続年数や競技レベルがオランダの参加者に比べて高かったことによる影響であると考えられるが，参加動機の差異が表すように，フランスではスポーツとしての Judo が広く普及し，競技力の向上を志向する土壌がオランダに比べて整っていることが示唆される．

今回対象としたフランス，オランダの参加者は必ずしも両国を代表するサンプリングはされておらず，本研究で得られた知見を一般化するには自ずと限界がある．しかしながら，柔道の経験年数が長く競技レベルの高いフランスの参加者，柔道の経験年数が短く競技レベルはさほど高くないオランダの参加者のいずれにおいても，柔道に対して海外から伝播した異国の文化を包含する身体活動という認識は強くなく，スポーツの一種目としてそれぞれのスポーツ文化に根ざしていることが明らかとなった．その一方で，武道の本質に沿った形で活動されていることが示唆され，グローバル化のプロセスの中でその普遍性が保持されていると結論づけることができよう．今後，この種の研究の蓄積が武道のグローバル化とローカライズ化による変容を明らかにする上で必要である．

本研究はJSPS科研費JP26350783の助成を受けたものです．

文献

ブルース・ミッシェル（2008）柔道の国際化．武道学研究40(3)，22-32.

中央教育審議会（2008）幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）.

Columbus P. J. & Rice D.（1998）Phenomenological meanings of martial arts participation. Journal of sport behavior 21(1) 16-29.

Duda, J. L.（2001）Achievement goal research in sport: Pushing the boundaries and clarifying some misunderstandings. In G. C. Roberts（ed.), Advances in motivation in sport and exercise（pp. 129-82). Champaign, IL: Human Kinetics.

藤田勉，杉原隆（2007）大学生の運動参加を予測する高校体育授業における内発的動機づけ．体育学研究 52(1)：19-28.

藤田勉（2009）体育授業における目標志向性，動機づけ，楽しさの関係．鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要，19：51-60.

船越正康，細川伸二，小野沢弘史，藤猪省太，正木嘉美，松本裕之（1996）柔道に関する意識の因子分析的研究(6)：国際比較 フランス編．柔道 66(4)：77-85.

FÉDÉRATION FRANÇAISE DE JUDO（2018） フランス柔道柔術連盟ホームページ，https://www.ffjudo.com/lhistoire-et-culture-du-judo,（2018年 4 月 1 日参照）.

Gernigon, C, Bars, H.（2000）Achievement goals in aikido and judo: A comparative study among beginner and experienced practitioners. Journal of Applied Sport Psychology 12(2):168-179.

Harwood, C, Hardy, L, Swain, A（2000）Achievement goals in sport: A critique of conceptual and measurement issues. Journal of Sport & Exercise Psychology 22(3):235-255.

北村尚浩，川西正志，山田理恵，横山茜理，野川春夫（2008）カナダにおける武道参加者の達成目標と参加動機．日本体育学会第59回大会体育社会学専門分科会発表論文集：79-84.

公益財団法人日本中学校体育連盟（2017）加盟校調査集計表．公益財団法人日本中学校体育連盟ホームページ，http://njpa.sakura.ne.jp/kamei.html（2017年11月 1 日参照）.

伊藤豊彦（1996）スポーツにおける目標志向性に関する予備的検討．体育学研究 41(4)：261-272.

International Aikido Federation（2018）About the IAF．International Aikido Federation ホームページ，http://www.aikido-international.org/iaf-about（2018年 1 月 5 日参照）.

International Kendo Federation（2018）What is FIK: Outline of International Kendo Federation（FIK）. International Kendo Federation ホームページ，https://www.kendo-fik.org/english-page/english-page2/What-is-IKF.htm（2018年 1 月 5 日参照）.

Ministère des sports（2017）Chiffres clés du sport. フランススポーツ省ホームページ http://www.

injep.fr/sites/default/files/documents/chiffres_cles_du_sport_2017.pdf（2018.4.3 参照）.

溝口紀子（2016）柔道の未来選択の位相：ヨーロッパ・フランス柔道から読み解く．一橋大学スポーツ研究 35：99-106.

村田直樹（2011）仏蘭西への道．村田直樹著　柔道の国際化．日本武道館：東京，pp.176-192.

百鬼史訓（2013）世界における武道の捉え方，武道の捉え方：世界の動向，日本武道学会第45回大会本部企画国際シンポジウム，武道学研究 45(2)：215-217.

Nicholls J. G.（1984）Achievement motivation: Conceptions of ability, subjective experience, task choice, and performance. Psychological Review, 91 (3), 328-346.

日本武道学会（2008）武道の国際化に関する諸問題．武道学研究 40 (3)：17-66.

日本実業柔道連盟（1998）'97世界柔道選手権大会視察・フランス柔道調査報告(2)．柔道69(4)：60-68.

西田保，小縣真二（2008）スポーツにおける達成目標理論の展望．総合保健体育科学，31(1)，5-12.

Judo Bond Nederland（2018），Judo Bond Nederland，オランダ柔道連盟ホームページ，http://www.jbn.nl/footer/english/cDU378_English.aspx（2018年 4 月 1 日参照）.

Roberts, GC, Treasure, DC, Balague, G（1998）Achievement goals in sport: The development and validation of the Perception of Success Questionnaire. Journal of Sports Sciences 16(4): 337-347.

SSF 笹川スポーツ財団（2016）青少年のスポーツライフ・データ：10代のスポーツライフに関する調査報告書．SSF 笹川スポーツ財団：東京

藤堂良明（1990）柔道の広まる過程について．体育の科学．40 (2)：109-112.

高木勇夫（2010）パリの巴投げ：フランス式柔道への道．坂上康博編著　海を渡った柔術と柔道：日本柔道のダイナミズム．青弓社：東京，pp.116-138.

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会（2016）東京2020大会追加種目決定！．東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ホームページ，https://tokyo2020.jp/jp/news/notice/20160804-01.html（2018年 1 月 5 日参照）.

Twemlow, SW, Lerma, BH, Twemlow, SW（1996）An analysis of students' reasons for studying martial arts. Percept Mot Skills 83(1): 99-103.

White, SA, Duda, JL（1994）The relationship of gender, level of sport involvement, and participation motivation to task and ego orientation. International Journal of Sport Psychology 25(1): 4-18.

山崎俊輔，永木耕介，岡田修一，徳田眞三，賀屋光晴（2000）フランス柔道人の「柔道観」について：日本柔道人との比較から．甲南大学保健体育論集 13，1-10.

山崎俊輔，永木耕介，曽我部晋哉，岡田修一，薮根敏和，徳田眞三，賀屋光晴（2005）オランダ柔道人の「柔道観」について：地域クラブの実践者を対象として．スポーツ・健康科学教育研究センター論集 15，17-27.